様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６４５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ１１９６３

研究課題名（和文）日本文化に根ざした対人援助関係の構築・維持・促進に関する看護教材の開発

研究課題名（英文）Development of Nursing Education Materials on Building, Sustaining, and Promoting Interpersonal Support Relationships Rooted in Japanese Culture

研究代表者
田所　良之（TADOKORO, Yoshiyuki）

東京医科大学・医学部・准教授

研究者番号：５０３７２３５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　日本文化に根ざした患者－看護師間の対人援助関係の構築・維持・促進に関する教育に資する看護教材の開発を目的として、日本で働く外国人看護師、海外で働く日本人看護師を対象とした研究等から知見の統合を試みた。
　慢性疾患患者や高齢者は長期に渡って医療者との関係が続くことからその中に日本文化に根ざした対人援助関係がみられる傾向があると考えられた。日本における対人援助関係を構築・維持・促進する看護として、細やかなおもてなしのような接し方、献身的な気持ち、言外情報の読み取り、親身な寄り添い、羞恥心への配慮、察し、礼儀を重んじる、調和と協調性、近すぎない距離感等の鍵となる概念が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
対人援助関係とその構築・維持・促進は、それぞれが属する文化・生活様式・考え方・価値観に強く影響をうけており、日本文化におけるものと欧米におけるそれとは異なる。欧米では自身の考え・意見や意向を明示し相手に伝えることがよしとされるが、自己主張しすぎることは日本文化においては昔から避けるべきとされていた。時代や文化も変化していくと考えられるが、日本においてよしとされてきた文化に根ざした看護はどのようなものかという知見を意識しておくことで、文化や時代の変化にあわせて、意図的に求められる看護のかかわりも変化させていくことが出来ると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to integrate insights from previous research which shows Japanese cultural interpersonal relationship represented by foreign nurses working in Japan and Japanese nurses working abroad, with the purpose of developing nursing educational materials on building, sustaining, and promoting interpersonal relationships between patient and nurse rooted in Japanese culture.
Interpersonal relationships well-shown in Japanese culture likely to be emerged with patient with chronic illnesses or elderly person who need to maintain long-term relationships with healthcare providers. As nursing care that building, sustaining, and promoting interpersonal relationships in Japan, the following key concepts were suggested: a detailed hospitality-like approach, a sense of dedication, reading extra-nonverbal information, sympathetic cuddling, consideration for feelings of shame, empathetically sensing, respect for courtesy, harmony and cooperation, and to maintain an appropriate proximity.

研究分野：看護学

キーワード：日本文化　対人援助関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）海外における自国の文化と看護に関連した研究

自国の看護技術の特徴に関連した海外の研究としては、多民族国家における少数民族の習慣的・宗教的な差異を背景として、それらの人々の文化的背景に応じた看護援助を提供する必要性を示唆した研究、スウェーデンにありフィンランド人が多く居住するナーシングホームにおけるフィンランド文化に配慮したケア（culturally congruent care）について報告している研究、文化的・言語的背景を配慮した移民Ｉ世への保健指導の研究などがみられる。しかし、これらの研究は、自国で行われている看護技術の特徴に焦点を当てて明らかにしようとしている性質のものではなかった。

（２）日本で生活する海外の医療専門職からみた日本の看護

海外の医療専門職で日本の医療系大学院に在籍する在日外国人を対象としたフォーカスグループインタビューによって日本の看護の対人援助関係に関する研究を試みた研究では、医療職であっても、看護師以外は、看護における対人援助関係について認知するのが困難であることが分かっている。

当該研究では、中国人看護師 4 名のデータ分析の結果、家族・社会システムや医療制度等に影響された看護師の責務・仕事内容に関する両国間の違いが示唆され、日本における対人援助関係の特徴として以下の 6 点が明らかになっている。すなわち、(1) 専門職として仕事上の関係としてのはっきりとした関係性を構築する、(2) 仕事中は、対応、言葉遣い、話の聞き出し方、会話等優しく患者と接する、(3) 関係性の維持を大事にして、患者の思いを尊重し、患者を傷つけないように配慮する、(4) 患者がいないところでも患者の存在そのものを大切にする、(5) 言葉で表現されない患者のニーズを工夫して察する、(6) 日本の文化の中にある曖昧さを理解した看護援助を行う、である。

（３）海外で生活する日本の医療専門職からみた日本の看護

オーストラリアで看護師として働く日本人看護師へのインタビュー調査の結果、日本における対人援助関係構築のための看護技術として、(1) 専門職としての患者との関係性を構築する、(2) 言葉のやりとりなしでも患者のニーズを理解する、(3) 患者を対等な立場に引き上げるために、尊重した態度や丁寧なことばで接する、(4) 患者のニーズが曖昧であっても時間をかけながら全人的なケアを提供する、(5) 患者との関係性を重視する、の 5 カテゴリが見いだされた。

また、イギリスで看護師として働く日本人看護師へのインタビュー調査も行われ、そこでは、(1) 無理を聞いたり抜け道を作ったりする、(2) へりくだって自分を下げることで患者を安心させる、(3) トラブルが起きないように場の雰囲気を整える、(4) 患者中心としタイプに合わせる、(5) 言葉の丁寧さを使い分ける、(6)　主張しすぎず、しかし与えられたことは確実に行う、(7) 自己紹介・挨拶をしにいく、(8) 賢い人よりいい人になる、(9) きめ細やか気づき平等に接する、等の看護技術が抽出されている。

（４）日本で働く外国人看護師とその指導プロセスでみえた日本の看護

日本で働くインドネシア人看護師を対象にしたインタビュー調査が行われた。その結果、インドネシア人看護師からは、(1) 丁寧な言葉遣いで患者を尊重し患者の権利を示す、(2) 患者と近すぎず遠すぎない関係性を作る、(3) 自らの感情をコントロールして患者に接する、(4) お互いの関係を維持するために言葉での表現を控える、の 4 カテゴリが得られていた。

また、日本で働くインドネシア人看護師らを臨床実践の場で指導していた日本人看護師のインタビュー調査も行われている。そこでの結果としては、(1) 長いつきあいの中でも慣れ合いになりすぎずわきまえて接する、(2) 高齢患者を人生の先輩として尊敬して接する、(3) 援助が受け入れられなくても患者の過去や現状を追体験して多面的に理解しようとする、(4) 患者に対して出来ることを親身になって考え続ける、(5) 落ち着いた雰囲気でかかわる、という看護技術の特徴が得られている。

しかしながら、その一方で、インタビュー対象者の経験した看護実践の場や看護の対象者によって対人援助関係を構築・促進・維持する看護技術の内容、方法、重要度に差がみられることが示唆されていた。

２．研究の目的

本研究は、日本における患者―看護師間の対人援助関係の構築・維持・促進に関する看護技術の特徴において得られた研究成果を基盤に、その内容を構造化し、教材開発につなげることを目的としている。さらに、看護実践の場に応じた適用可能性を明らかにし、構造化の過程を経て、日本における患者－看護師間の対人援助関係の構築・維持促進に関する教育に資する教材開発につなげていく。本研究により、日本の文化・社会・医療組織の中で暗黙知として存在し、日本人看護師によって既に実践されているが、十分に解明されていない日本的な看護技術の構造化

が行われ、その知見をもとに教育教材が開発されることになる。構造化された知見ならびに教材を用いて、看護教育への多大な貢献が可能となる。つまり、日本人への看護教育のみならず、FTA（自由貿易協定）／EPA（経済連携協定）によるインドネシア・フィリピン人看護師をはじめとし、諸外国からやってきて日本の看護・医療の場での実践をめざす留学生・外国人看護師への看護教育に寄与することが出来ると考える。

３．研究の方法

（１）日本文化に根ざした対人援助関係に関する情報収集

医学中央雑誌 Web 版、PubMed および CINAHL、Google Scholar 等、二次文献やインターネット上の検索エンジンを用いて、日本文化に根ざした対人援助関係に関する研究論文、文献、書籍等から情報収集を行った。また、関連する内容の学会学術集会や研究会・セミナーへの参加を通して、関連する研究発表について資料収集を行った。

（２）先行研究の二次分析

当初、日本に働く外国人看護師および外国人介護士、ならびに、海外で働く日本人看護師へのインタビュー調査を予定していたが、新型コロナウィルス感染症蔓延禍において対面でのインタビュー許可や施設利用、移動・渡航などに対象者施設ならびに研究者施設での制限が伴った。そこで、先行研究のインタビューデータの再検討をし、質的・帰納的に二次分析をすることで、再カテゴリ化とテーマの創出をはかった。

（３）専門家会議での検討

日本文化型看護学の創出に関する研究に携わり、日本文化型対人援助関係に詳しい複数の研究者による専門家会議をもち、その検討結果をふまえ、それまでに得た情報や知見の整理を行った。

４．研究成果

分析の結果、日本文化に根ざした対人援助関係を構築・維持・促進する看護技術の特徴として以下の 6 つテーマが見いだされた（一部、分析途中のものを含む）。

（１）対象者の存在そのものを大切にして真摯に感じよくかかわる

本テーマには、初対面あるいは既知の間柄にかかわらず自ら挨拶をすることや、親身になって相手のことに専心すること、“いい人”になること、相手がその場にいなくても相手の存在を大切にする等が含まれた。

（２）適切な距離感と関係性のもとで専門職としての仕事を確実に細やかに行う

本テーマには、患者と近すぎず遠すぎない関係性を作る、専門職としての患者-看護師関係を構築する、きめ細やかに気づいて平等に接する、自身の感情のコントロールを行う、主張しすぎずしかし確実に行う等が含まれた。

（３）対象者との関係性の維持を大切にし、相手を傷つけないように一方的な言葉での表現を控えたり相手の思いに配慮したりする。

本テーマには、お互いの関係を維持するため言葉での表現を控える、相手の思いを尊重する、相手との関係性を重視する、相手を傷つけないようにする等が含まれた。

（４）場を整えるように落ち着いた雰囲気でかかわる

このテーマには、トラブルがおきないように場の雰囲気を整える、落ち着いた雰囲気でかかわる等が含まれた。

（５）丁寧な言葉遣いと話し方を選びつつも状況により使い分けて対象者を尊重・尊敬し権利を擁護する態度で接する

このテーマには、患者を対等な立場にひきあげることができる言葉をつかう、人生の先輩として高齢者を尊重する、言葉の丁寧さを使い分ける、丁寧な言葉遣いで患者の権利を示す、へりくだって自分を下げることで患者の権利を示す、対応、会話など優しく患者と接する等が含まれた。

（６）言葉で表現されない曖昧で隠れたニーズを察したり想像したり工夫したりして多面的に理解する

日本文化の中にある曖昧さを理解して援助する、時間をかけながら全人的なケアを提供する、患者の過去や現状を追体験して想像する、言葉のやりとりなしでも察する、等が含まれた。

日本文化型対人援助関係は、長期に渡って医療者との関係が続くことが多いと考えらえる慢性疾患を有する患者や高齢者との関係性において色濃くみられる傾向があった。日本における対人援助関係を構築・維持・促進する看護として、細やかなおもてなしのような接し方、献身的な気持ち、言外情報の読み取り、親身な寄り添い、羞恥心への配慮、察し、礼儀を重んじる、調

和と協調性、近すぎない距離感等の鍵となる概念が示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関